

短歌

近詠十一首

平 戸 裕 人

血を吐きし夢にめざめし曉に雁啼き渡る聲聞きにけり

醫者の薬も草津いでゆも利かさらむと看護婦あまた吾をからかへり

雨はれし朝のデッキをめぐりつつ昨夜の記憶のよみがへるはや

舷側に立ちし少女がひたむきに雲仙岳を眺めつつ居り

熊本行の發車待つ間のしばらくをベンチに凭りて葉書したたむ

寮をめぐる樹々の若葉に音たててゆふぐれどきの雨やまぬかも

翻譯書讀み初めたりし頃よりゾファツツヨを憎む心ありしか

癒えざらむ身をし敷きて朝鮮へ歸り行く君と又も會はぬやも

加藤邸を急ぎ出で来て川岸の夕暗ゆふぐらがりに尿放にようちけり

火の山に馳はせし輝雄が歎かへば Die neue Erde を見つつ寂しき
實驗に疲れきぬれば背のびして齊藤大人うしの歌口ずさむ

柿の花

長尾壽雄

柿の花のほひゆたかなりこの夕べふるき洋燈らんぶをあかあかと灯す

舗道にも灯ともりぬ秋の雨人繁き巷に光りつゝ降る

ま晝間の墓場の隅に我ひとり聲たかだかとヴィロンを読む

向日葵は風にゆれつゝ晝深し此道しろじると墓場につゞく

落陽おしびさす龍田の山は静かなりか細きかぜに木の葉散りつゝ